

1. 上杉名誉会長 エミール賞受賞お礼のスピーチ原稿

昨年10月、ナポリで開催された第63回国際宇宙航空連盟の年次総会におきまして、上杉名誉会長がアランDエミール記念賞を受賞なさいました。その折、受賞お礼の「スピーチ」(英文)の原稿を準備されましたが、上杉様のお許しを得ましたので、下記、掲載致します。

Good evening ladies and gentlemen,

I find myself extremely honored to be receiving the 2012 Allan D. Emil Award, and first of all, I would like to express my sincere thankfulness to IAF award committee for selecting me for this prestigious award.

I am certain that it's not just my sole effort that has brought me here. Because I have been blessed with having opportunities for more than four decades to work with my great seniors, excellent colleagues and many expertized team members not only in astronautical research but also in domestic and international space programs.

I would like to make a special mention of the late Prof. Hideo Itokawa who was born in 1912, just one hundred years ago, as same year as Dr. Wernher von Braun was born. Prof. Itokawa was the first researcher in Japan in the discipline of space

engineering. Without being stimulated by his inspiration and spirit of challenge, we could not have achieved our challenging space missions such as Hiten and Hayabusa.

Prof. Itokawa said that the most important step toward the goal is anyway to take the first step. On a closing note, I would like to say that I will continue to make efforts to proceed towards the new goal.

Thank you very much !

2. 日本語訳文

本年5月、米沢第一ホテルにおきました「エミール賞受賞 祝賀会」が企画され、全国から約200人の参加があり盛大に挙行されました。

名誉会長はこの時も、「お礼のスピーチ」の原稿を準備されました。これもお許しを得ましたので下記掲載します。

上記英文の訳文はこのスピーチの中ですべて語られておりますが、それに加え、話し上手の名誉会長のサービス精神から、受章当日のハプニングがユーモアを交えて「告白」され、出席者の笑いを誘ったそうです。

以下、上杉様原稿です。

本日は、私のアランDエミール記念賞受賞を祝っていただき、誠にありがとうございました。

お忙しい中、かくも大勢の方々にお集まりいただきましたこと、篤く御礼申し上げます。

この賞は、国際宇宙航行連盟（IAF）という世界62カ国、246団体が加盟する世界中の宇宙活動を支援する非政府組織から毎年1名に授与されるもので、私は昨年10月にイタリア・ナポリで開催された第63回のIAF年次総会（IAC）において受賞の栄に浴しました。

その授賞式はIACの閉会式で行われるのですが、そこで思わぬハプニングが起きました。と言いますのは、受賞に際して英語でスピーチをしなければいけませんので、このように原稿を作り、何度も何度も練習して式に臨みました。最初のパラグラフは：

Good evening ladies and gentlemen から始まり、

I find myself extremely honored to be receiving the 2012 Allan D Emil Memorial Award, and first of all, I would like to express my sincere thankfulness to IAF award committee for selecting me for this prestigious award. (以下和訳)

「2012年アランDエミール記念賞を受賞しましたこと、誠に光栄に存じます。そしてまず最初に、この名高い賞の受賞者として私を選んでくださったIAF授賞委員会に深甚の謝意を表します」

でした。ここまでは上手く喋ったのですが、あれほど練習しておいたのに突然次のフレーズが出なくなってしまいました。壇上で暫しおろおろしていたところ、これを感激のあまり感涙にむせんでいると勘違いしたプレゼンターが私の肩を抱いて、「コングラチュレーション、コングラチュレーション(おめでとう、おめでとう)」と言い、会場大拍手となってしまいました。

というわけで、残りの挨拶をしなくて済んでしまいましたが、本日このようなお祝いの席を設けていただきましたので、ナポリでは言えなかったお礼の挨拶の残りの部分を日本語で申し上げることをお許しいただければ幸いに存じます：(以下英文後半の和訳。なお最後のパラグラフは英文とは異なります)

「私が本日この栄えある賞を戴くことができたのは、私一人で成し得たものではありません。

私が40余年にわたり、宇宙工学研究のみならず、国内および国際宇宙科学計画において働くことが出来たのも、偉大な先輩、優れた同僚や多くの熟練したチームメンバーに恵まれたからに他なりません。特にここで我が師である故糸川英夫先生について述べたいと思います。先生は、今から丁度100年前の1912年生まれであり、日本の宇宙工学の草分けでありました。先生の発想と挑戦の精神に鼓舞されることなしでは、「ひてん」や「はやぶさ」のようなチャレンジングな宇宙ミッションを達成することができなかつたことは間違いありません。

ロケット打ち上げや宇宙計画に携わる者の間では「ロケット・ウィドー」という言葉があります。私も多いときは1年に百日以上家を留守にすることもあり

ましたが、長年にわたりこれに耐え、私の宇宙研究開発活動を支えてくれた御台所や家族に感謝してご挨拶といたします。ありがとうございました」

以上でございます。

米沢の皆様への特別なお礼の言葉は、長くなってしまいますので書面にしてお届けすることにいたしました。御手許のクリアファイルに入っておりますので、後程ご覧いただければ幸いに存じます。(以下3. ご参照)
本日は誠にありがとうございました。・

3. 祝賀会出席者へ配布された「御挨拶」

(PDF で頂戴した「御挨拶」をそのまま掲載します。)

御挨拶

本日は、私のアラン D エミール記念賞受賞を祝っていただき、心より御礼申し上げます。お忙しい中、かくも大勢の方々にお集まりいただき、感激いたしております。

工学分野、特に宇宙科学の研究を行う者にとっては当然のことですが、今回の受賞対象となった研究成果は、一個人でできるものではなく、諸先輩、同僚、友人、後輩、さらには家族の多大な協力と支援があつて、はじめて成し得るものであることは言うまでもありません。昨年十月ナポリでの授賞式でも、「個人としてではなく、ともに歩んできた皆の代表として賞をお受けします」と謝辞を述べました。

そして私の場合、「宇宙研究開発と上杉謙信、或いは鷹山、との関係は？」という難しい質問を受けることがあります。その時にはたとえば次のようにお答えしています。

「上杉謙信は、自ら戦を仕掛けたり、自国の領土を広げようとしたことは一度もありません。

一方、国を治めるにあつては、「常に篤く仁を施し、あまねく徳を布くならば、子孫の代に幸いともなるであろう」と述べています。戦においては「義」を貫き、領内を治めるにあつては「仁」の心をもって、謙信は乱世の時代を生きようとしたのです。

私自身、宇宙工学の世界で様々なプロジェクトに関わり、人を束ねる立場になった時、心得としたのはやはり先祖のようなあり方でした。結局のところ、組織とは「人」であり、そこで働く人たちがいて初めて組織と呼べる。どんなプロジェクトに携わっても、当人たちが楽しい気持ちで取り組まなければ、絶対に成功はあり得ない、という考えを常に持っていました。また、私が就いていたプロジェクトマネージャーという立場では、プロジェクトを成功させるために、様々な局面で戦わねばならないこともありました。そんな時は、私が防波堤になり、すべての責任を負う。その代わり、部下には思い切りやれ、失敗を恐れるな、と訴えて、皆が伸び伸びと働き、良い成果を出すことができるよう心がけました。」

(月刊『致知』二〇一〇年四月号 連載「子孫の語る日本の偉人」最終回「上杉謙信」より一部抜粋)

鷹山公の教えについては、小惑星探査機「はやぶさ」が帰還して、インタヴューに忘えた後、山形新聞論説委員の奥山匡さんが二〇一〇年七月十七日付け朝刊のコラムに次のようにまとめて下さいました。

「(前略)「はやぶさ」には異例とも思われるほど盛りだくさんの技術が目いっぱい詰め込まれていた。しかし、上杉さんは「壘謀ではない。それまでの経験から、やっでできないことはないという信念があつた」と振り返る。「やっでできないことはない」……。ふと思ひ浮かんだ米沢藩中興の祖、上杉鷹山の言葉、「なせばなる なさねばならぬ何事も。ならぬは人の なさぬなりけり」

経験に裏打ちされた上杉さんの固い信念は、プロジェクトチームの中堅から若手の研究者、技術者へと世代を超えて受け継がれ、挑戦は続いていく。(後略)」

末筆ながら、謙信公、鷹山公を崇敬する米沢の方々のご鞭撻がなければ、四十余年にわたり、研究に邁進できなかつたと、深く感謝申し上げ、御礼の御挨拶とさせていただきます。

本日はまことにありがとうございました。

平成二十五年五月二十五日

上杉 邦憲